

工ニておそなはり、年内うり出しの間ニ合かね候ハ、是亦明午ノ十二月うり出しニ可致候間、板ヲ船ツミニいたし、来夏迄ニ登せくれ候様申越し候。私事^{あひ持}の義ニは候へとも、実の板元ならず候間、自由いたしかたく候。依之四集ハ、明々年末ノ正月二日うり出しニ致し度旨申候。是ニてビツクリいたし、且呆れ候得とも、商ひ向の不都合と申ニハ手もつけられず候故、その意ニ任せ、ともかくもと挨拶はいたし候へ共、中一ヶ年置候而うり出し候事、あまりに長くしく、ばかしく、八月中より大病人の中ニて、昼夜出精いたし候骨折、画餅ニ成り候故、もはや五集ヲ書キ候氣もなくなり候ニ付、則大坂河茂に急ニ書状差出し、四集江戸の手配り少しも無如在候処、十二月製本不出来候てハ、捌ケ方不立候ニ付、明々年正月二日うり出しニ被成度よし、承知ハいたし候へ共、拙者事追々老年ニ及ひ候処、左様ニ中一ヶ年ツゞも間を置たくうり出しニ成候てハ、大部之もの中ノ生涯満尾心もなく候。依之、俠客伝ハ四集迄ニて已来五集ハツゞり不申候間、かねて承知いたし候様、きひしく申遣候。全体四集ハ五集の縮染ニて、作者の専文ハ五集に有之、いろく^{シタツメ}腹稿いたし候を捨て仕舞候仕合、御賢察可被成候。大坂板元ハ河太、巡島記ニてこり候間、俠客伝も二の足を踏候処、丁平達て願ひ候て、一式引請万事江戸板元の通りニいたし候よし申ニ付、ツゞり立遣し申候処、果して如此変卦出来遺憾不少候。俠客伝四集うり出し大長

のひニ成候故、美少年録四集も来年ハ延引、明々年より又はしめ可申哉、いまたしれかね候。その内ニハ拙齡七旬ニ及ひ候故、氣力追々^くおとろへ可申候。何事も勢ひニ従ひ候ものニ候処、只今の利のミ考、はやく全力満尾させて株板ニせんと思ふ了簡なきハ、賈豎の猿智恵ニて是非もなき事と、歎息の外無之候。右之仕合ニ付、四集も此節板下ともし不残出来候へとも、うり出しハ明々年末ノ正月ニ成り可申候。御一笑と奉存候。

(天理図書館蔵「馬琴等書翰集」九〇)

四 丁子屋平兵衛の大坂行については、二四 天保四年四月九日二五 同五月六日書簡参照。

二八 (天保五年) 二月一八日

一 甲午日記(二月二日)

一、夕七時前、いせ松坂殿村佐六状大封一ツ、大伝馬横丁殿村店より届来ル。正月廿日の状也。右状中俠客伝三代金式分在中、外ニ江戸名所図会代金為替手形入にて状三通。一通ハ年始祝義状、壱通ハ旧冬¹の返輸長文也、一通ハ旧冬申遣し候異聞²の返輸也。正月七日此方より差出し候俠客伝三集、小津新蔵方へハ正月十六日ニ着いたし候よし、佐六分

大伝馬町店迄出し候包ハ、大伝馬町店より正月八日出ニいたし候^{正し}。依之正月廿日迄未届よし申来ル。遺憾甚し、江戸名所図会一冊買とり、差越しくれ候様被頼之、この外、とし玉もの小刻唐本小説、幸便ニ出し候旨、請取届候よし也。おもち書状の請取書遣ス。

- 1 小林花子「曲亭馬琴書簡特集」一三所収（上野図書館紀要」第四冊）
- 2 堀内快堂「曲亭書簡集」（「日本芸林叢書」第九卷所収）

二 同〔正月六日〕

一、予今日いせ松坂、殿村佐六・小津新蔵へ年始状、副翰とも四通認之、其後宗伯手伝ひ俠客伝三集式口、右ハとの村頼之分、外ニ同人ニかし候水滸伝全書之又七十二回より七十六回迄一冊封入、紙包ニ作る。則かけめ四百目余有之、小津新蔵ニ同書老口紙包ニいたし、此かけめ式百匁、両様とも年始状・とし玉・黒丸子等封入、夕七半時前ニ出来、即刻しまに申付、殿村佐六ニ遣之、紙包并ニ添状一封ハ、大伝馬町^{（虫損）}殿村^{岡かえ}店へ遣し請取書とらせ、小津新蔵分紙包ハちん先払ニて、嶋や佐右衛門方へ遣し、是又請取印形取之、但島やかよひ新帳未差越候間、去巳年帳へ請取[□]ケさせ、追て新かよひへうつし候様申遣ス。暮六時しま帰宅。

三 同〔二月三日〕

一、四時比、大伝馬横町殿村店より松坂主人殿村佐六より之

二八 〔天保五年〕二月一八日

小紙包一、同郷小津蔵新蔵より竹筒包一ツ届来ル。おもち^{（P.A.）}請取書遣ス。佐六より到来とし玉小刻唐本人中画一帙・楠公詠草墨本也。小津新蔵よりハ年始状・副翰共二通、とし玉竜爪筆十枚也。

四 同〔二月四日〕

一、予作者部類一の巻境浦の分老丁、もくろく式丁稿之早。夜五時より小説人中画老巻半冊許、四時過如例一同就枕。

五 同〔二月八日〕

一、予今日類焼見廻の世話等ニて多用、且昨夕の疲労ニ付休筆、夕方より人中画式之巻・三之巻半分許披閱、今夕四時如例一同就枕。

同〔二月九日〕

一、予八犬伝九輯一の巻本文之内わつかに半丁稿之、暮時より火事さわきにて休筆、今夕人中画三の巻・四の巻半分許披閱、但し四の巻ハ今古奇観ニ有之、移花の旧話なれは見るに不及、今夕九半時比一同就枕。

五 癸巳日記〔正月二十七日〕

一、昼前大伝馬町との村店より松坂との村佐六書状届来ル。おもち請取書之。右ハ当月十五日出之年始状、并ニ添状略

文式通也。

同〔二月八日〕

一、昼後飛脚や状配り、松坂殿村佐六より之紙包届来ル。お
ミち請取書遣之。右ハ正月十五日出タラ便、かねて案内有
之候とし玉唐本春柳鶯全口四冊一帙也。

* 参考 天保四年三月八日付篠斎宛書簡

(小林花子「曲亭馬琴書簡特集」一〇)

六 甲午日記〔正月一六日〕

一、大坂河内や茂兵衛年始状、并ニ別翰一封、今日丁子や平
兵衛被届之。俠客伝三集正月二日ニうり出し候よし也。四編
ハ大坂ニて不残すらせ候間、船つミいたし差越しくれ候様
申越候よし也。

七 同〔正月四日〕

一、今夕五時過、丁子や平兵衛より手代二人を以、俠客伝三
集明五日うり出し候よしニて、如例本二口、金百疋被贈
之。……

八 同〔正月一六日〕

一、昼後丁子や平兵衛為年礼来ル。予并ニ宗伯も対面、とし
玉台附扇子箱、并ニ箱入ねり羊肝式棹入、金百疋被贈之。

……此余雜談數刻歸去。

九 天保四年一二月一二日篠斎・桂窓宛別翰 (堀内快堂「曲亭書翰
集」所収)

一、江戸名所図会の事かねて御聞及も被成候哉。この書は天
明の比、内神田佐柄町(アヤ)の名主斎藤庄左衛門が思ひ起し候
処、不果志て没し候に付、その子庄左衛門親の稿を続候と
て、文化中より折々鵬齊がりゆきかひ相談いたし、絵は雪旦
にかゝせ候。小田原看市の図の板下を見候は、二十四五年
已前の事に候キ。此庄左衛門は、冷泉家の歌をよみ候て生
ぬるなる人物なりき。肝煎名主にて冊子の改役人の一人な
りければ野老も面識に御座候処、十ヶ年已前に身まかり、
その子庄左衛門弱冠なれども父祖の志を果さんとて、誰や
らに相談いたし、稿を続候よし及聞候処、全部やうく出来
いたし、明春はうり出し候よしに御座候。勿論板元は日本
橋通老丁めの須原や茂兵衛也。凡四十年許かゝり候事故、
須原やも久しく元入いたし、及迷惑候へども、名主の事な
ればせんかたなく、編者の思ひのまゝにいたしうち過候よ
し、出板の節かふても見んとおもひて聞候処、全部十巻に
て代金壹両貳分のよし。是におそれて沙汰に不及候。名所
図会流行の折すら唐土名所図会代金壹両貳分なる故にうれ
ず候。況今日名所図会すたり候。よしや江戸の名所図会な
りとも、かゝる時節に高料の新本、尤心もとなき事に御座

候。出板の節本御地へも早々廻り可申候。御かりよせ被成御覽候へば、御高許ひそかに御しらせ可被下候。

〔日本芸林叢書〕第九卷

二〇 注一参照。

甲午日記〔二月五日〕

一、四時過清右衛門来ル。……且松坂殿村より頼申越候江戸名所図会之事、丁子やかけ合可申事、もし丁子やニてとのひかね候ハ、須原や茂兵衛へ罷越可申、并ニ馬くらう横丁ひやうしやに表帑注文之義等、件々及示談。……

同〔二月七日〕

一、同刻〔昼飯過〕清右衛門来ル。過日申付候江戸名所図会、丁子やニ有之、則かけ合候処、おろし直段ニ可致上旨申候よしニて、右之書一〇請取持参、尚又大伝馬町殿村店ニて金子可請取事、須原や源介ニて右平〔虫損〕燕可請取事、件々用事申付、右殿村金子手形わたしおく、依之清右衛門早々帰去。

二 同〔二月七日〕

一、八半時前、佐久間町藤堂様表門前町湯屋火元のよしニて

二八 〔天保五年〕二月一八日

失火有之、大風ニ付いつミ橋辺忽延焼、則向ふへうつり弁慶橋通り下町一円大火に及ぶ。大抵己丑三月廿一日の大火のことし。

一、夕七時比小伝馬町・大伝馬町・池丁迄延焼ニ付、丁子や鶴や等皆類焼のよし。風鍋町辺より駿河町越後や等西側ハ火をのかれ候よし風聞、北風ニて西少しまじる故也。

一、夜中も弥大風ニ付火鎮らず、今夜終霄延焼、深川へ飛火のよし風聞、何方迄やけ込候哉未詳。

一、今朝しまを以、中川金兵衛へ使を遣し、八犬伝けわく帑之事丁子やに可申伝旨申遣ス。然所右之大火ニて丁子や類焼ニ付、そのかいなし。

同〔二月八日〕

一、天明比火鎮ル。はま町辺ハ大橋手前迄、八丁堀筋は佃嶋迄、通町ハ西側残り、東側のミ、日本橋通り・芝辺迄延焼のよし風聞、具敷申事ハ未知と云、後ニ聞、日本橋通りハ石町より中橋迄東、側のミ延焼也。

一、八半時比より宗伯を以処々類焼見廻遣之、丁子や平兵衛ニ手拭三筋・梅干一折、鶴や喜右衛門へ手拭式・梅干一折、西村や与八・山口や藤兵衛に手拭二ツつゝ、森や次兵衛・大坂や半蔵・二見や忠兵衛・ 手札也。丁子やハ浅草京やうら店借用、大坂や半蔵も同様ニて借宅いたし候よしニ付、くやみニて罷越、見廻申入候よし、其外ハ皆焼迹ニ罷

越候よし也。処々橋焼落候ニ付、廻りみちいたし□川を
わたし候よし也。焼死のもの弁慶橋辺、其外二三人つゝ有
之、死十余人見かけ候処、男女親子三人人抱合焼死のものも
有之、検使未済様子ニて其まゝ道ニ倚有之、犬の死骸尤多
しと云、処々無滞廻勤、薄暮帰宅、丁子や・鶴屋・西村・
山口・森や・二見や土蔵ハ皆恙なしと云。

三 同〔二月九日〕

一、暮時より檜物町松平阿房守殿抱やしき火元のよし失火有
之、西南風烈ニ付数町延焼、中橋中通りより通式丁め・老
丁めの間、火通り西側へ焼ぬけ、西河岸迄焼失のよし、今
夜九時比火鎮ル。

三 同〔二月一〇日〕

一、昼九時前より南の方ニ失火、初ハかまくら河岸のよし申
候へ共、丸の内よし風烈ニ付、及延焼いまた火元、并ニ延
焼多少詳ならず、火元西丸下松平伯耆守殿長局より出候よ
し也。

一、夕七半時過、渥見覺重来ル。予夜食中ニ付不面、宗伯対
面。……覺重叔母松平伯州家中ニ付見舞罷越、叔母連候同
人媳等三四人つかへり、又罷越、只今帰路のよし也。火
さき鍛冶橋外へ焼出、二口に成り、一方ハ八丁掘辺過日焼残
り候本田やしき等焼亡のよし、一方ハすきやかしのかたへ

やけ候よし也。薄暮早々歸去。

一五 同〔二月一日〕

一、昼時九つ過比、小石川水戸様御屋敷失念、西北風烈敷候
間、飯田町清右衛門方少し風脇ニ候へ共、お次迎として宗
伯罷越、火元之火外へハ出不申候得とも、飛火のよしニて、
小川町へうつり阿部備中候やしき近辺焼亡、神保小路井戸
殿此外旗本衆少々焼失のよし也。八時過宗伯お次を携、清
右衛門方証文類預り帰宅。清右衛門方へハ久右衛門をはし
め山の手より多く右用の人來り、不殘片付候よし也。夕七
半時前、おさきお次の迎ニ來ル。則お次同道ニて歸去。但
し八半時比風鎮り候ニ付、火も亦滅とめ早。後に聞く、阿部備
中守殿中やしきハ
恙なし、火元間宮□則殿ニてその
辺の武家十七八軒類焼のよし也。

一五 同〔二月一三日〕

一、今日南大風尤猛、夕七時比ニ至て初て風止、去ル七日よ
り今日迄日々風烈七ケ日也。

一、右風止て後、夕七時過駒込追分辺ニ出火有之、火元そば
や也と云。此時北風ニ成候得とも幸ひに風なし、七半時比
消し留早。

一六 同〔二月一六日〕

一、四半時比、御成道石川殿屋敷中長屋より失火、此方風脇

候得とも近処の事故不安心の処、幸ひにて大火に至らず、
昼前消し留早。右ニ付第一番に大坂や半藏・丁子や平兵衛
来ル。此外下町より追／＼かけ着くれ候而、清右衛門来ル。
委細ハ別帳ニ記ス。森村元立も近所に参居候よしにて来
訪、とかくする内火鎮り候間、右衆一同歸去早。

一、此節あやし火等の訴も処々より日々有之、度々の火災ニ
付、とり片付用意いたし可申旨宗伯へ示談、可持旨過半葛
籠ニ納め拵へおく。依之家庙も位牌ハとり収め、過去帳の
ミにいたしおく也。

〔参考〕「異聞雜稿」抄

〔続燕石十種〕第二所収。ここには本
館蔵の原本より抄録した。以下同。

〔瓦板貼込、其二〕

出火場所方角附

甲午二月十日比より市中を売ありくもの、是ハ
初板也。中句より又別板三枚、画図大小二枚、
印行して売ありく物これ也。〔馬琴注、朱書〕

頃は天保五甲午年二月七日昼八ツ時頃、外神田佐久間町貳丁
目より出火して、折節西北風はけしく、和泉橋近辺・松永丁・
佐久間丁より飛火ニ而、柳原土手下・松下丁・九軒丁・佐野
様御屋敷、夫より竜閑丁・鎌倉横丁・久右衛門丁代地・弁慶
橋・松枝丁・富永丁辺・石原様・大沢様・市橋下総守様御屋
敷、お玉ヶ池横瀬駿河守様并ニ高橋様、其外之御屋敷数多、
紺屋丁・新土手より白銀丁三丁目・四丁目、大伝馬塩町・鉄
炮丁・小伝馬丁・牢御屋敷・石出帯刀様、其外町家不残、亦

二八 「天保五年」二月一八日

一口は、豊嶋丁・細川長門守様御屋敷・大和丁・江川丁・元
岡井丁・亀井丁・橋本丁・小伝馬上町附木店・馬喰丁老町
目・貳丁目、此辺平一面、同三丁目・四丁目片かわ、并ニ馬
場御郡代屋敷焼のこる。夫より横山丁三丁目角・両国吉川丁
片かわのこる。同広小路見せ物小屋・両国御橋焼のこる。橘
丁四丁・同朋町・村松丁・久松丁・浜丁・矢ノ倉、此辺平一
面、夫より小笠原様、并ニ津輕様・船越様・牧野様・一ツ橋
様御屋敷、是より飛火ニて新大橋焼落る。浜丁、水野老岐守
様・牧野遠江守様・永井様・安藤様、此辺之御屋敷数多御類焼、
亦一口は本石丁鏡堂、并ニ本丁三丁目より四丁目・大伝馬町
通・旅籠丁、大丸や呉服店残る。大門通・田所丁・長谷川丁・
富沢丁・人形丁辺、平一面。堺丁・葺屋丁、両芝居人形座ま
で不残焼る。并ニ芳丁・大坂丁・竈河岸・かきから町・銀座御
屋敷・甚左衛門丁・親父橋焼落る。稲荷堀、松平越中守様・
安藤対馬守様・酒井雅楽頭様御中屋敷、并ニ奥山様・戸田様・
本多肥後守様・小野様・林肥後守様中屋敷・松平玄番頭様上
屋敷、戸田近江守様・酒井出雲守様・尾州様・紀州様御蔵屋
鋪焼ル。永久橋のこる。戸田采女正様・松平和泉守様・久世
隠岐守様御中屋敷、箱崎丁・南部堀、并ニ御船手永代橋きわ
ニ而焼止ル。亦一口は、伊世丁・瀬戸物丁・宝町老丁目より
三丁目まで、東片かわ焼る。越後や呉服店のこる。小田原丁・
安神丁・長浜丁・本船丁・小船丁・あらめ橋焼落る。小網丁
不残、鎧渡、牧野長門守様御上屋敷、坂本丁・茅場丁・薬師

一八五

堂・靈巖嶋不殘焼る。埋立地新穀蔵のこる。松平越前守様御中屋敷・向井将堅様御船手屋敷、夫より佃嶋・新田嶋不殘焼る。亦一口、江戸橋蔵屋敷、四日市万丁・青物丁、海盜橋焼落る。通老丁目白木や呉服店・近江店焼のこる。同式丁目より中橋広小路迄東片かわ、音羽丁・平松丁・佐内丁・小松町・油丁・新右衛門丁・檜正丁・下槇丁・本材木町老丁目より六七丁まで、中橋さや丁・塗師丁にて焼止る。亦一口ハ、八丁堀、九鬼大隅守様、并ニ松平中務少輔様御屋敷・八丁堀神田代地・北嶋丁・岡崎丁・龜嶋丁、其外不殘焼る。松平越中守様御上屋敷、焼のこる。松屋丁・本八丁堀五丁目まで、中の橋・稻荷橋、焼落る。向ハ、南八丁堀式丁目、松平右近将監様より伊井様御中屋敷、堀田主税様・堀田式部様・松平内匠様御屋敷迄、是より鉄炮洲稻荷社、焼る。松平阿波守様御中屋敷・東湊丁・船松丁・細川能登守様・松平長門守様御上屋敷、同十軒町迄焼る。当七日の未ノこくより焼出し、翌朝卯ノこくニ而、よふ／＼焼止ル也。凡男女死人有事いまた不知數、江戸町家困窮之者共、類焼いたし、難渋之義、筆紙ニつくしかたし。なれ共、此度之大火前代之嘶ニもならんかと、其あらましを書印ノ已。

(虫損)
甲午三月十二日、市中を売あるくもの、購得之。〔馬琴注〕

〔瓦板貼込、其二〕

天保五年甲午二月九十兩日

(虫損)

同十四日、売あるくもの。

(虫損)
於門前買得之。〔馬琴注〕

時節当来とハいへと、其翌九日酉の初刻、南風甚々敷して、日本橋檜物丁より出火して、數寄屋丁・元大工丁・三嶋長屋川岸通・呉服丁式町・西川岸迄、跡火にて、上槇丁北側より通四丁目両側老丁目まで焼る。日本橋御高札場焼のこる。実ニ目もあてられぬ次第なり。

「折も／＼、時も／＼とや、又候、同月十日午の刻頃、大名小路辺より出火して御類焼之御屋敷、其あらましを書記ス。松平伯耆守様・松平丹波守様・林肥後守様・備前様・松平和泉守様・松平能登守様・松平三河守様御屋敷より鍛冶橋御門焼る。京極大膳様・松平土佐守様・松平阿波守様・南御町奉行様、并ニ數寄屋橋御門焼る。折節、西風はけしく、飛火いたし、上槇丁・富槇丁・南槇丁・桶町・三会所・中橋広小路町、南伝馬町、不殘。さや丁・ぬし丁・松川丁・鈴木丁・因幡町・常盤丁・柳町・具足丁・炭丁・本材木町八丁目まで、西ハ、南大工町・鍛冶町上下・五郎兵衛丁・量丁・北紺屋丁・白魚屋敷上下、京橋焼落る。銀座四丁、東ハ三十間ほり不殘、太刀売・弓丁・西紺屋丁・鍵屋丁・新肴丁・弥左衛門丁・數寄屋町川岸・南鍋町・佐柄木丁・かゝ丁・宗十郎丁・滝山丁・守山丁・南大坂丁・山王丁・八官丁・丸屋丁・東側焼る。通りハ、尾張丁布袋や・夷や呉服店焼る。竹川町・出雲町・金六町・金春屋敷迄焼る。新橋のこる。東ハ、南八町ぼり・あさり川岸・大富丁・本多下総守様・伊達紀伊守様御屋敷・

新庄様・牧野様・堀田相模守様・西尾様・細川越中守様・諏訪伊勢守様御屋敷、夫より松村丁・木挽丁・森田勘弥唐・人形座焼る。同四の橋・五の橋共焼落る。汐留橋迄、夫より牢女ヶ原、狩野様・松平周防守様・柳生但馬守様御屋敷・仙石様・加納遠江守様御屋敷・仙台様・田沼様・宮原様・溝口信濃守様・奥平大膳大夫様、又一口は、筑地合引橋焼落る。松平土佐守様・梶野様・能勢様・松下様・巨勢日向守様・松平様・備前様・桑山様・松平飛彈守様・南部信濃守様・桂川様・稲葉様・青山様・秋田様・莊田様、并ニ依田様・朽木隠岐守様・横田様・本多様・木下様・石川橋・三枝様・花房様・戸川様・畠山様・津田様・伊東様、夫より西御門跡御堂、并ニ地中不残焼る。東は小笠原様、築地小田原町・飯田町、其外町家不残、紀州様御蔵屋敷・浪除稻荷ニて留る。夫より向築地、増山河内守様・村垣佐太郎様、此式間焼のこる。稲葉丹後守様・稲葉中務少輔様御屋敷・多賀様・大嶋様・尾州様御蔵屋敷まで、南ハ松平陸奥守様御屋敷裏長や少々焼る。脇坂中務大輔様御屋敷焼る。芝口壱町目より三丁目東井戸きわニて焼止るなり。此外御屋鋪様方、并ニ町家不知数、凡十時ほどの間、人民心痛る事かきりなく、然とも四かいなミしつまり給へば、前代見もんの嘶の(虫損)種と(虫損)書印ノ已。是ハ初板候後にくハしきもの三枚。画図も大小二枚出たり。(馬琴注)

二八 〔天保五年〕二月一八日

一、甲午二月十一日午牌、小石川水戸様御邸より失火梅の御殿と云。今日も西北の風烈にて、諸小屋、并に諸舎多く烏有となりぬ。しかれども大家なれハ、その火を邸外に出さず、未下刻消し留早。この折、小川町雅子橋通り、間宮所左衛門殿大納言様御小納戸屋敷より失火、小石川飛火也といふ。その辺の武家武拾軒許類焼。申牌より風止たるにより消し留早。御家巨片岡某火元也といふ。御守殿ハ御別条なし。*頭注「間宮は飛火にあらず、つけ火なるよしにて、六尺とらへれたりと云。」

一、同月十三日、風烈、申牌、駒込追分蕎麦屋より失火。この折幸に、風やすらきたるにより、大火に至らずといへとも、延焼の町家少からず、根津権現の裏門前にて、火鎮ると云。一、右間宮殿の失火は、飛火のよしを御支配へ届ありしよし、聞えしかと、実ハ悪棍ワルモノのつけ火にて、その翌日、件の火つけは搦捕られたりとそ。

一、又駒込の失火も悪ものゝわざ也。この火つけも翌日搦捕られたりと云。件の火つけハ、元来牢中に在る罪人なるか、七日の大火の折、放されたれハ、三日の後かへり参るべきものなるに、かへりまゐらざるのミならて、又かゝる悪事をしめる冥罰、立地にむくひぬと知れるもの、話也。」

一、二月七日大火に及ひしその火元ハ、神田佐久間町の湯屋也と風聞ありしか、湯屋にハあらず、藤堂殿の表御門前なる三味線屋也とそ。この三味線屋の隣に土圭師あり、これ彼火元あらそひに及ひしと聞えしか、この日、件の三味線

屋ハ琴に作る桐をクスベ賊るとて、店前ミセサキにて火をたきしかハ、藤堂家の辻番より咎めて、かゝる大風烈に、家外にて火をたきこと、不埒也。はやく消すへしといハれしかハ、その火を家内へとり入れて、又その桐を(虫損)損すべしとそ。かゝる事もあれば、申わけ達かたかりしにや、三絃屋ハ入牢し、土圭師ハ手鎖にて町役人に預けられしといふ也。

一、二月十日の松平伯耆守殿の失火ハ、その火長局より起りたり。吾壻の叔母ハ、彼家臣其の母也。そかをる長屋ハ、長局の向ひなりけれハ、火勢烈しくて出ることかなハす、長屋の窓へ戸をおろしかけて、その戸を階子にして、窓より逃出たりといふ。この日大名小路なる類焼の諸大名にて、家臣の子とも・みやつかへの女房に焼死したるもの多しといふ。童子杯ハ家中へあそびに出たるを尋るに知れず、その間に屋敷一面に焼たりけれハ、すべなくて皆のかれ去りしとそ。

一、七日の大火に、焼死のもの多かり、予か相識るもの、兩三人、目撃したるを数るに三四十人に及へり、その多寡いかばかりなるや詳ならずといへとも、百をもてかそへたりけん、但幸ひに己丑の春の大火の折の多かりしに似ざるのみ。

一、当年甲午四緑の木、中宮にあり、又二月ハ七赤の金、中宮に入りぬ。月家の金、年家の木を尅するのミならず、これに加るに、火をもてせしかハ、七日・九日兩日の火災に、

江戸の中央なこりなく焼たり。その兆、己丑の火と相類すもて、警となすへし。

一、二月十六日下谷御成道、石川殿の中屋敷より失火、幸ひに、この日大風ならざりけれハ、延焼に及ハす、只これのミならず、火元詳ならざる火ハしはくあり、又江戸中よりあやし火の訴、日々に多しといふ。

一、旧冬ハ、雨雪しはく也けれハ、江戸中火事稀也。今茲正月に至りても雨多かりしかハ、火事なかりき。荒噤の折、火災なきをせめてもの事なりとて、衆人たのもしく思ひたるに、二月に至りて右の如し。雨ハ正月廿七日にふりたるのミにて、二月上旬より日毎の風烈、十七八日に及へり。

この故に、世の人火災をおそれて、家具を蔵に収め、土蔵なきものハ葛籠に納め、或ハ荷つくりなとして、スハといハ、逝去んと欲する用心のみなし、天明丙午の正月より三月まで、しはく火災を怕れしと相似たり。天明丙午にハ、江戸中春しはく火災あり、秋に至りて洪水あり、その明年丁未の夏、江戸中飢たり。今茲ハ噤と火と一度に禍ありといへとも、天明に比れハ、なほ甚しからず、幸ひといふへし。

一、当今江戸なる材木屋に材木すくなし。しかれとも七日・九日兩日の火にやけたるものハ、板囲ひもなしかたからざりしに、十日已後ハ、諸材木甚高料にて容易ならざれば、速に仮宅をいとなむもの稀也。松板ハ、官府への書上

ケ相場、金壹両ニ六拾貳枚なれとも、その相場に売るものなし。よりて相對をもて、金壹両ニ四拾枚に買ふと云。屋根板ハ、己丑の大火後、金壹両ニ貳拾三四把なりしに、今茲大火後、金壹両ニ九把になりぬ。瓦ハ壹坪金壹分前後にて葺たるか、九拾匁ならされハ葺すといふ。この余貴きこと皆これに準す。公儀の御入用御さし支になることもあらん歟とて、木場の材木にハ封印を附られ、江戸入の材木筏も川筋に出迎て、外へ売らせす、皆御用になるといふ。かれは庶人ハかあゆきもの也。そか中に、大伝馬町なる大丸屋のミかねて仮普請の伐組あれば、類焼後七日めに仮普請成就して、商売をはしむること例の如し、これらを江戸のきほひといハまし。

一、類焼の窮民御救として、小屋を作らせらるゝこと先例の如し。己丑の御救小屋より多し。凡九ヶ所西国・豊嶋町・佐本町河岸・八丁堀・築地・久保町・数寄屋河岸等也と云。何事もしはゝなれば、世俗奇とせす。こたひの大火に、くさゝの話說あるへけれども、予か為にいふもの稀也。

一、二月九日の檜物町火事の火元ハ、松平阿波守殿の抱屋敷也と聞えたり。此抱屋敷ハ、文化丙寅の春三月の大火後、鍛冶橋内の上屋手挾也とて、檜物町の沽券地二ヶ所を購求られ、家作ハ町並なれと門番所あり、家主ハ幾人歟片隅に長屋を給はりて、町役に宛られ、当宿の諸士ハ上屋敷へかよひ勤す也。この所鍛冶橋御門外御塹の向角也。二月九日

にこの所より失火して、次の日拾日にハ上屋敷も亦焼けたり。

一、二月十一日、水府御邸の火事にハ

峯姫様御立退にて、先高松の御住居へ御立よりあり、それより御城へ入らせられけり。本日高松家の邸ハ風下なるに、峯姫様御立よりにて冗紛限りなかりしとそ。その翌十二日高松家御鷹の鷹拝領にて、上使到来せられしとそ。彼家の家宰黙翁の書中に聞えたり。

* 頭注「此段伝聞のあやまりなり。黙翁の状下に報す、合せ見るへし」。
〔書簡は巻頭に貼込みあるも便宜上末尾に掲げる。〕

一、二月十日、丸の内の火事の翌日、沼津侯卒ス。七十二歳、なほ内々にていまた披露に及れず。当日の風聞にハ、已前より恙ありしに、十日の大火にいたく駭き給ひて、暴に卒せられしといふものあり。実ハさにあらず。十日の朝も登城すとて、ゆあみし給ひしに俄に、心地例ならすと宜ひて、いく程もなくことたえ給ひしとそ。

一、二月八日ハ例のことく、上野 御呉屋に 御参詣 御成の御沙汰ありしに、前日七日佐久間町の失火、大火に及ひしかハ御延引、同月廿日に至て上野へ 御参詣 御成あり、かれは佐久間町の火元ハ、御咎軽かるへからすなど風聞す。いかになるやいまた聞知らず。

一、又十日の火事にハ、鍛冶橋・数寄屋橋両御門御焼失なれハ火元の評判宜しからず、伯州ハ深川の下屋敷に在り、自分遠慮にて登 城せられすと云。
後に聞く、遠慮七ヶ目に
して御免ありしとそ。この秘

録は、只遺忘に備ん為に竊にしるしおくのミ。人に見ることを許さゝるもの也。

一、甲午の春二月十八日癸丑、今晚より大風雨、但し雨ハ多天明より雨歇ム。辰の中刻より大雨。この折雷初て鳴る。尤甚し。凡五六声。巳牌より雨霽れたり。この折昌平橋内、并に駿河台辺へハ大電多くふりしと云。予ハこれを知らず。廿一日の朝、宇津宮侯の家臣大嶋生来訪、語次、彼電の事をいはる。聞くに、電の大サ小指の頭程あり、ふる折石杯へあたれハ、三四尺はねあかりにぎ、そをうかひ茶碗へ拾ひ入れしに、忽碗中に満ぬ。午後まで解さりしと也。吾庵とハ僅に二町余隔りたるに、こゝらへハ電一顆もふらさりき。こも亦一奇といふへし。二月廿一日追記。この後亦異聞あらハ別にしるすへし。

一、二月七日大火後、処々よりあやし火の訴、日毎に多きにより、町奉行所より町々へきひしく被仰渡、多ク増し人足を致し、昼夜由断なくうちめくり、あやしきものあらハ推とらへて申出へし。右ニ付町入用多くなるとて難渋を申ス。地主あらハ申出へしと触らる。又中旬に至りて再触あり、去ル七日大火之節、石川嶋・佃嶋類焼に付、よせ場の罪人を放されしに、かへり参らざるもの多し、件の罪人等悪事を致ス歟のよし、その聞えあり、弥以町々昼夜きひしくうちめくり、あやしきものあらハ捕へて可訴出と仰わたされしと云。

一、去秋より、米穀昂貴なれハにや、こたひハ表店なる町人

も、仮宅不如意のものハ、願ひて御救小屋に入るもの多かり。神田佐久間町河岸なる御救小屋ハ、殊に広かれとも、入るもの多かれハ立錫の透もなしとそ、凡三ヶ月はかりハ公儀の御やしなひにあふことなれハ、恥をしらざるものハ、さまで路頭に立にもあらぬも、御救小屋に入らまくほつするなるへし。御救小屋ハ先例五間に十間也。こたひ佐久間町河岸なるハ、五間ニ廿間也と云。この外もしかるや。

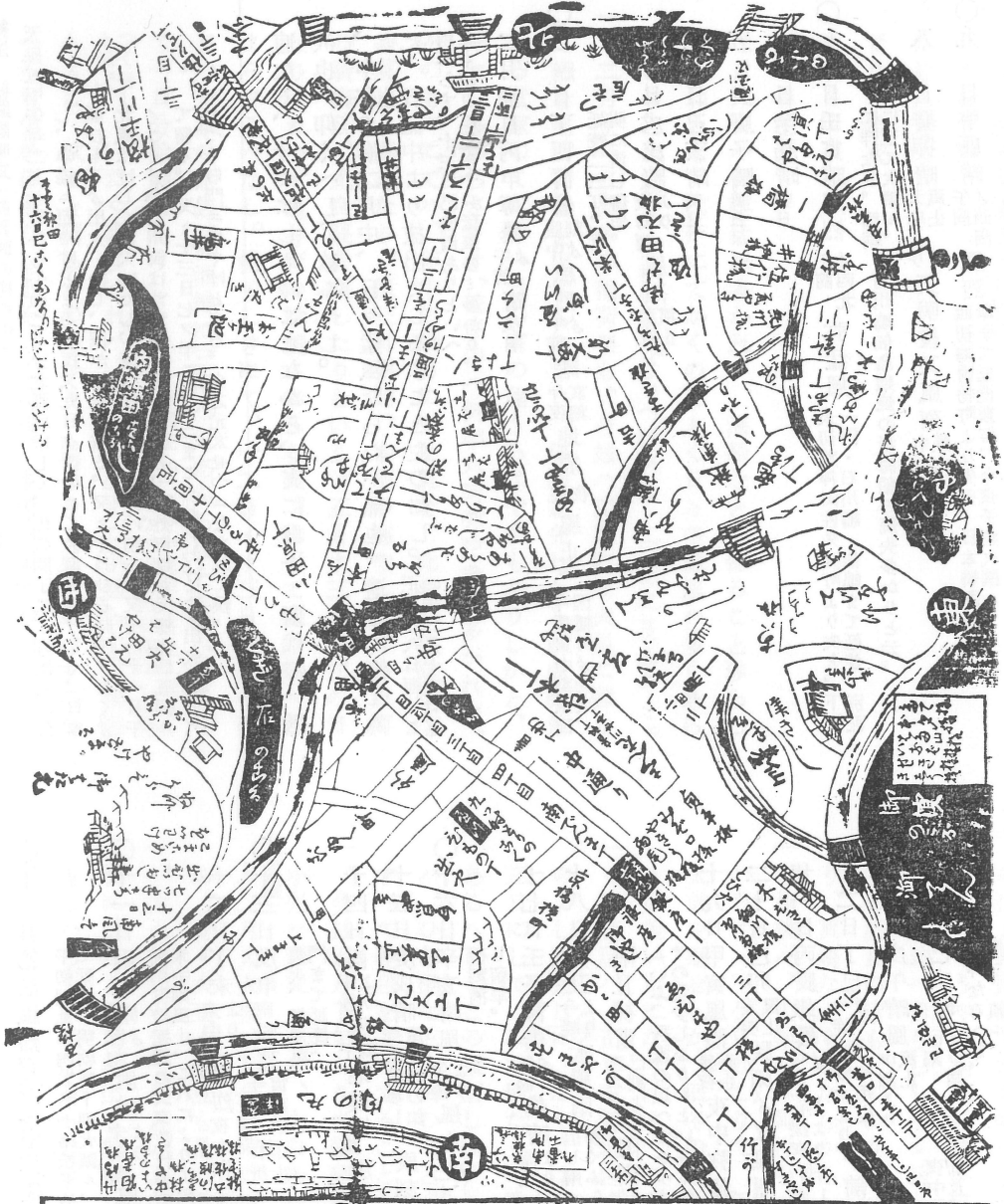
一、二月七日・拾日の大火に類焼の坊賈等、或ハ蔵庫へさしかけの小屋を作り、或ハ仮初にいさゝかなる小屋を作りしもの。日々の猛風に勝ず、就中二月十三日、暁よりの大風雨に多く屋根を吹放され、困したりと云、宣也。当今、屋根葺等処々の造作に手廻りかぬるにより、そか女房娘杯にも葺しむ。凡三四尺四方に葺たるをもて来て、仮小屋の屋根に推当、只とち目にのミ竹釘を打たれハ、幾坪ありとも、一人にて只一日半日に成し果すこと神速也。その三四尺に葺たるものハ、皆屋根葺等か妻子の所為也。かゝる屋根なれハ、猛風にあふて破損せさることなし、御救小屋なども、己丑の春ハ苦葺にて、三方ハ松板もて羽目にせられしに、こたひハ羽目にすへき処も、みな苦なり。かゝれば、公儀にも御貯の板多からぬ歟、或ハ請負しものゝ、板ハ直ひ貴き故に、すへて苦を用ひたるならん。

一、二月七日の大火の事、京大坂へハ同十一日に聞えたりと云。大坂の書賈河内屋太助より予に贈りたる近火見舞の書翰、十二日出六日限にて到来しけり。脚力の住還、その神

(「続燕石十種」不載)

甲午二月中旬より市中を売ありくもの、同月廿一日、於門前貴得之この□精細の絵図一枚あり

とも、紙中広けれ、ここに貼しかたし。小石川の火事は、た元[]せし、高貴に懼りし也。さうへ、小石川との「かくくき」もの也。俗人の斟酌笑ふべし。

[illegible]

補注 絵図説明文(前頁図の枠の中)

天保五甲午年二月七日ひる午のこく北風はげしく、佐久間丁二丁目出火いたし、中橋ニ而やけどまる。扱又九日夕西のこく南風はげしく、日本橋ひも丁出火いたし、西かしにて留る。又十日ひる時午ノこく北風はげしく出火いたし、芝口うち通にてやけ留る。又そろ十一日午ノこく小石川御はた元様出火いたし、其外御はた元様方四五間にて留る。又十三日七ツ半ころのこまこめおいわけより出火いたし、ねづら門にてやけとまる。火之元太せつになされて候。

速なる、今にはしめぬことなから、実に奉平 聖代の 恩沢也。仰くへし、歎ふへし。

一、甲午の春二月中、日々猛風ならぬハ稀也。遺忘に備ん為に、日記中より抜出てしるすこと左の如し。正月廿八日雨、この後二月十三日迄雨ふらず、十三日己後雨ありといへとも湿りに足らず只猛風のミ多かり。

二月朔日丙申薄曇午前晴美日

○二 日丁酉薄曇辰中風烈午前晴今夜地震深風止。今晩寅中刻京橋延焼二三町、天明に消し留早。

三 日戊戌晴辰初刻風烈深夜風止。

四 日己亥晴美日

五 日庚子晴美日

六 日辛丑晴美日

○七 日壬寅晴風烈午前弥猛風未初刻神田佐久間町より失火。下町に詳なり。明朝 石川嶋佃島類焼の折海船の焼失多かりと云。

八 日癸卯晴天明より天明後又風烈申中刻

○九 日甲辰晴午前風烈西初刻増物町より失火、日本橋西河

○十 日乙巳風烈西北夜中弥猛風刻地震今夜戌刻午初刻丸の内大名小路松平伯州より失火、築地一円、芝口三丁目まで延焼。明朝辰下刻火鎮ル、別記に詳也。

○十一 日丙午晴巳刻風烈未初刻風止午前刻、小石川水府御邸失火、同時に小川町に延焼の武家数軒小石川ハ外へ延焼に至らず、未中刻風止これによりて両所ともに消し留早。

○十二 日丁未未中刻風烈夜中弥猛風今日時正、俗に云彼岸の中日也。

○十三 日戊申南風烈今晩折々烈風雨也午刻晴申中刻駒失火、根津裏門まで延焼。

十四 日酉午後風午地震申刻風止

十五日庚戌晴今朝霜多し辰刻より薄曇程快晴美日

○十六 日辛亥晴風午後風止巳中刻、下谷御成道、石川伯州中長屋より失火、幸ひに風烈ならざれハ延焼に至らず。午初刻消し留早。

十七 日壬子薄曇午前曇晴深夜大風烈明日天明より

十八 日癸丑今晚大風雨但し雨ハ天明より雨并ニ風止辰中刻大雨且初雷五六声雨霽午後風夜弥風烈今朝雷雨の折、昌平橋

十九 日甲寅風烈屋夜不中夜中弥猛風

二十 日乙卯風止辰刻又風烈申中刻風止夜曇

廿一日丙辰薄曇午前晴深夜雨多ふらず

廿二 日丁巳今晚雨雪まじり午前雨止午後薄晴

廿三日戊午晴風申中刻

廿四 日己未晴巳刻風烈夜中弥大猛風、子寅二時尤甚し、亥初刻浅草郊外なるへし、(虫損)

廿五日庚申薄曇風烈今朝辰刻風止

廿六日辛酉

廿七日壬戌

廿八日癸亥

廿九日甲子

晦 日乙丑

二月八日ハ例年猛風多かれハ、海船なども憚ること珍らしからねとも、江戸にてかくのことく日々の猛風ハ多くあらさること也。後の話柄にもなるへければこの記に及ぶのミ。

一、二月十一日初午の稲荷祭も、今茲ハ江戸町々火災に憚りて幟を建、神燈を出すものなし、但燬を免れたる御曲輪外なる武家のミ、十一日の宵の程うちはやすもありしかと、それも多からざりき、彼岸中ハ例年六阿弥陀参り多かれハ、その寺々にてハ、年中の物日にすなれと、此春の彼岸には寂莫也と聞えたり、但正月中旬、本所の梅やしき、角田河の新梅莊、尤良賤群集したりといふ。正月十三日ハ郊の日なりけれハ、亀井戸の妙義へ参るもの、なへて梅屋敷へ立よらざるハなし。梅やしきにて、十二日・十三日、この両日ハ一日の茶錢、醬油樽に三樽つゝあふるほとあり、金にして一日分拾兩余なりしとそ。*頭注「一日分十金余の茶代は梅ほしつくせし。の価ともになり、この日梅ほしも売と云。」いたく客多けれハ、茶を汲出すに手廻らす、水盃もよし、飲せと罵るもの多かり、処せきて尻をかけすにかへるも少からざりしとそ。この日、本所角田河の辺にハ、

二八 「天保五年」二月一日

午牌より諸店みな食物をうり尽して、物ほしきものもすへなし、やうやく両国橋頭へ来て、腹をつくらひしと、十三日に妙義へ参りしものゝ話也。この日ハ浅草観音のほとりなる酒食の店も、午より後ハ、みなうりつくしたりといへり、真崎などもおなしかるへし。

一、相撲ハ、去年の冬興行中、しはく／＼の雨雪にて、とりをハらす、三ケ日のこりて、年ハ暮たり。今茲正月下旬より太鼓を廻せしか、旧冬の残りをとり果たる歟、二月七日の大火後いかになりけん、知らず。

一、三芝居ハ、正月の中芝居はしまらす、二月に至りて開場のよし聞えし(虫損)に、はやくはしめたるハ五六日、おそきハ兩三日にして、みな焼たり。歌舞伎役者等は、大坂へゆくもあるへし、この後雨しはく／＼にて、人氣おたやかにならすハ、ひな棚なども例のことく飾るもの稀なるへしと聞ゆ、すへて春色を失ハさることなし。

一、今茲正月下旬より米価聊引さけて、金老兩に白米五斗、小売ハ百文ニ七合、上白米ハ六合五勺になりぬ。しかる(虫損)二月大火後、又金老兩に四斗、小売ハ百文ニ六合也といふ。麦・大豆・小豆も是に準して価又登れり。

一、大火後、ボテつりといふかつき商人すくなくなりぬ。焼場に灰かき人足に出る故也。商ひよりわり合宜しと。云そもしハらくの程なるへし。

一、今茲三月上旬公家衆参向、延引なるへしとそ、この事二

月廿三日聞にき。そのわけ異日分明なるへし。この事虚説也。二月廿九日なりけん公家衆御到着也。

一、牢屋敷揚り屋類焼ニ付、先例の如く、元飯田町に焚出しを被為命、同町月行事差添、日々焚出しの食料を調進ス。且、飯田町三軒の湯屋より毎日朝夕兩度、飲湯を担桶一荷つゝ調進すといふ。

一、御救小屋に入たる窮民等へハ、糶藏町会所より日々老人別ニ飯三合弱打抜にして、一日に一ツつゝ与へられ、湯ハ一荷つゝその町々より可遣と命せらる。全類焼の町々なれは、尤不便なれとも、各町日々輪番の湯を遣すと聞えたり。
一、今度嚴令により、町々火消人足を増すをもて、町入用尤多かり。人足一人を増せハ、足留錢・革羽織・股引等、一ケ年に金拾両許の費用なきことを得す。かくの如くにして、一町ニて五人つゝ増せハ、年中に五拾金余の費用也。類焼の町々の地主等、費用続かさるも多かれハ、殆困し居りといふ人多けれハ、非常を防ぐに便りよかるへし。しかれとも猛風の折、大火に及びてハ、人力のよく防ぎ留むへぎにあらず、その人足を増んより、願くは人々よく火を警めて、怠ることなきにしくはなかるへし、思慮浅きものは(虫損)火をおそれず、常に視聴の間嘆息することあり、火を警ることを旨として、火を怕るゝこと 官をおそれゝことくならハ、よく訶愚突智のあらびを防ぐに足るへし。*頭注「おもふに、消人足の員数を私に減しつる町々もあらん歟、されハ場所にて人足すくなき故に、さる嚴命のありしなるへし。」 旧来より御定の火

〔木村縣老書翰〕

一、異聞雜稿耄冊補遺之分、御見せ被下、忝奉存候。但右之内二月十一日水府藩邸失火之条ニ御記被成候峯姫君様、弊邸に御立寄之儀は、小子書狀ニ候哉。訛謬認上候事哉。其日峯姫君様ニは御庭内へ御立除而已ニ而、屋敷へ御出之儀も無之、

御城に御出之儀も無之候。弊藩

文姫君様ニは 御城へ御立除ニ候処、其前日、

鍋嶋侯比々谷之

御住居様十日之火事ニ而、御城へ御立除、一夜御滞留、

翌十一日御帰殿御供揃ニ相成候処に

文姫君様御出ニ而、 御城

御台様御広敷ハ、紛冗誠ニ筆紙ニ難尽事ニ御座候。 鎮火

之上、

文姫君様ニは其夜直ニ御帰殿之事ニ御座候。其翌日上使ニ而屋敷ハ大ニ混雜仕候事ニ御坐候。

右之次第小子書中ニ訛謬有之候与相見へ、御書中少々事

実違居候間、御直置被下候様奉希候。

右異聞雜稿耄冊返壁仕候間、御落手可被下候。

一、雜稿中御書損誤字与存候処へ不審紙付置申候。

一六 「平山冷燕」の篠斎よりの注文のことは、既に一七 天保

三年四月二八日の馬琴書簡にみえるが、篠斎は天保四年一〇月一八日出(同二八日馬琴落手)に再びこれを記し、馬琴は返書を一月六日に送り、篠斎のもとには同二四日に届いた(小林花子氏「上野図書館紀要」第四冊 曲亭馬琴書簡特輯 一二所収)。

一、右に付、喻世明言・警世通言・五色石・平山冷燕等、被成御覽度候間、当地書賈をあさり候て、有之候はゞ、申上候様被仰越、承知仕候。いつみや幸衛門・いつみや庄次郎杯は、唐本も多く取扱ひ候書賈候間、申遣し置可申候。乍然、小説物はやり候故歟、毎度注文申遣し候ても、なし／＼と計申候間、いかゞ可有之哉難計候。

一九 甲午日記「二月五日」

一、四時過より宗伯出宅、麻布六本木土岐村元立に年始祝義にて罷越候ニ付、予名代かね候て、麻布古川大郷金藏に右同断、夫より水天宮に参詣、且三田長運寺へ墓参いたし、尚又芝神明前いつみや市兵衛方へ罷越、年始答礼申入、岡田嘉七方に立寄せ本類注文いたし、帰路十軒店英大助にも本注文申し遣候趣及掛合早、今日土岐村夫婦空宅のよし也。宗伯七半比帰宅。

一、今日宗伯へ申付候岡田や英やにて注文之書無之よし、須原や源介方ニ冷山平燕有之、但高料のよし也。芝泉市も他行中のよし、今日迄にて年礼不殘勤早。

二八 「天保五年」二月一八日

甲午日記「二月七日」 注二〇第三項参照。

三〇 甲午日記「二月二六日」

一、予悪寒同様ニ候へとも今朝おして起出、勢州松坂殿村佐六へ遣し候書状認之、同書小津新藏へも一通差添、昼時出来。依之宗伯ニ申付、佐六頼ニ付かひ入置候江戸名所図会一口・平山冷燕一帙・異聞雜稿等あて板入、一包ニいたし、状中へハもめんいと代金三朱封入、あふらかみ当紙包ニいたし候処、七百四拾匁有之、右脚ちん壺朱ト式百六十九文指添、しまを以瀬戸物丁嶋やに出し、かよひ帳へ請取印形取之。……夕七時過帰宅。

三一 三村清三郎「曲亭書簡集拾遺」(「日本芸林叢書」第九卷所収)には、左の書簡が収録されている。

(已三月同十一日着)

覚

一、五拾匁 江戸名所図会 一部

一、廿八匁五分 平山冷燕 一帙

一、七分 荷物本あて板代

一、六匁式分九厘 七百四拾目飛脚ちん

一、廿匁式分五厘 取替候もめんいと代の内

過差引

メ八拾六匁七分四厘

一九五

此金壹両式分也。伝馬町御店より請取。

差引三匁式分六厘残り申候。此残り銀、伝馬町御店へ返上可致哉。御幸便之御示教可被成下候。夫迄預り置申候。委曲ハ先便申上候ニ付、御承知与被存候。依之御勘定のみ如此坐候。以上

巳三月二日

滝沢

殿村様

右の書簡を案ずるに、「巳」は「午」の誤記または誤読と解せられる。すなわち癸巳日記には該当の記事は見当らないが、甲午日記「三月一日」に左の記事がある。

一、今日清右衛門不参ニ付、明日油丁間や罷越候序ヲ以、大伝馬横丁殿村店へ罷越、松坂佐六より差越候手形をわたし、金壹両式分請取、その内金三分ハ丁子やに遣し、残り三分ハ此方ね持参候様清右衛門へ覺書いたし、右手形并ニ佐六ね之請取状一封、おさきへわたし申遣ス。この事清右衛門へ用向、右覺書の内へしるし遣之。

三 馬琴は「異聞雜稿」に「江戸名所図会」のことを記している「続燕石十種」第二所収。

一、甲午の春正月、江戸名所図会出ツ江戸日本橋通一丁目。須原屋茂兵衛板也。全本七巻を釐て二拾冊とす。こたひの印行ハ前集十冊也。この書の編者ハ、神田雉子町の名主、斎藤市左衛門、諱ハ幸雄

号松濤軒。寛政の初より發起せしに、果さずして世を去りし長秋。かハ、その子市左衛門幸隆一稱、親の志を紹て、編集十数年に及ひしかとも、いまた浄書の功を遂すして、文政改元の年身まかりにき。幸孝の子、市左衛門幸成号月、父祖の遺志を果さんとすること亦年あり、終に校訂浄書して、上木の功成りぬといふ。かゝれハ父祖三世、約莫四十許年の苦心を積たるもの也。この事冠山老侯、及亀田綾瀬の序に詳也。その文、秋里籬嶋の名所図会に倣ふて、是も亦俗書たることを免れずといへとも、然とも穿鑿精細にて、古人の漏らせしを補ひ、世の人の思ひかけぬ事も多かり。しかれともなほいかにそや思ふくたりもなきにあらず。そか一二をいハ、芝浦の条下に、南向茶話写本を引て、南向亭云本文に書名をいハす、芝といふハ、彼地の古老の説に、海岸近き処に柴を建て、海苔のかゝるをとる故に、木の小枝を柴といふにより、地名に呼ひしか、後に芝に改る歟、云云。編者云、按するに此説是ならず、海苔をとるハ元浅草のミにて、昔ハ今のこつく品川にハなかりしなれハ、古へにいハんハ断なきに似たり、云云といひて、この下に太田道灌の平安紀行を載て、文明十あまり二年の比、水無月のはしめつかた、土さへさけてとか、旅人のぬしのものせし、避暑の床をはなれて都にまうのほりぬ。中略。芝といふ処を過るとて、露しけき道の芝生を踏ちらし駒に任するあけくれの空、といふ道灌の歌を引て証にしたり、この弁理あるに似たれとも、いまた必とすへか

らす、愚按するに、南向茶説の話、是にちかかり。彼処ハ海苔をとる柴の多くある処なれハ、ふるくハたけの柴の浦と呼たるならん、更級日記に、たけしハ竹柴に作れるにて、分明ならずや、されハ竹柴の竹ハ仮字にて建也。海岸ちかき水中に多く柴を建たる浦なれハ、建柴の浦といひしを、後に柴芝同訓なるにより、芝に作りて今に改めたるならん。海苔ハ昔浅草のミにてとりしといへるも、昔浅草川なる漁者を大森へ移されしといふによりて。芝浦にハ海苔のなかりしと思へるも偏見なるへし、昔浅草ハ鎌倉街道にて、且浅草寺に詣る人も多かれハ、柴にてとりたる海苔をも浅草へ遣して売せしにより、今もなほ浅草海苔といふなるへし。又道灌の歌に、芝浦を過る折、芝の地名を芝生にかけてよまれたりとして、芝の証にハしかたし、柴芝同訓なれハ、柴を芝生の芝にかけてよめらんこと、かゝる例シ歌にハ珍しからず。されハ編者の引たる廻国雜記に、道興准后の柴浦にてよみ給ひし歌に、船にこりつむ柴のうら人とあるニそ、当時の光景を目撃し給ひしまゝなるへけれハ、柴浦たるへき明証也。只これのミならず、今も大森にて海苔をとる料に、海岸近く建る柴木を、土俗ハヒビといふ也。越谷吾山か彼ヒビを見てよめる狂歌に、ひゞ／＼にのりとするひゞハひゞにしてこの下句を忘れたり。とあるハ是也。よりて思ふに、柴浦ちかき町名に、今も日比谷あり、日比谷の名ハ昔より呼来たれハ、此日比谷も彼海苔をとる小柴を、土俗ハヒビといふ

により、そのヒビを出す処などにてありけん歟、是も亦しるへからず。とまれかくまれ、予ハ南向茶話の説をなか／＼よしと思へり。芝浦の本文ハ巻の第三冊一百十六丁の右に見えたり。

一、又右同書巻の二第二冊七十五丁の右半井ト養翁居宅地の条下に、ト養の狂歌、ト養ハ本道とこそ思ひしにうみちをとるハ外科かのそミ（虫損）か、（虫損）とあるを載て、且編者の云、按するに、江戸砂子にト養の詠とすれとも、（虫損）意ハ他の人の詠るかことし、不審少からずといへるハ、只（虫損）の歌を江戸砂子に載たるをのミ見て、その他の考の足らざる也。江戸砂子に云云としるしつけたるハ、沾涼か伝聞のあやまち也。この歌、一書には右のことくならず、

ト養ハ外科もすこしハいたす也うみちをとつてあとハるやしき

とあり、是にてよく聞えたり。かゝる事いくらもあるへけれども、予この比右眼の患ひありて、燈下の読書不便なれハ、わづかに二三冊を披閱せしのみ。いまた卒業に及ハす。程よく見て思ふよしもあらハ、異日又この下にしるすへし。

批して云、江戸名所図会ハ、その功編者ハ四分にして、その妙ハ画に在り、違境の婦女子の大江戸の地を踏むに由なきハ、これにます玩物あるへからず。冠山老侯の序に、余云云、恨幸雄之輯愆期失時。又云、若夫覽者尤其不雅馴可謂不知類矣。この二語よく褒貶を尽されたり。この書、寛政中、諸名所図会流行の折に出なハ、実に楮価踊貴すへし、只今出

て且画図なくハ、増補改正江戸志^{写本}十一卷 あれハ、読書の人
にハ珍しけなからんを、幸ひにしてこの佳妙の画あり、臥
遊の為にいと／＼宜し、この画工雪旦ハ予も一面識あれと
も、かゝる細画ハいまた觀さるべき。縦、北斎に画かする
とも、この右に出ることかたかるへし。^{編者三世の内で、予ハ幸雄と今の幸成を知ら}

す、幸孝ハ文化の初より草紙の禁忌改正役をうけ給へりたる一人にて、冷泉家
の歌をよみたり、この編集の事に就て根岸なる亀田鵬斎かりしは／＼赴きて意
見を問ひ、をさ／＼談合すといひにき。筆工嶋岡生かこの書の内なる、船町
の魚市の画図の板下のいて来しに、筆工をかき入るゝとて、そをもて来て見
せたるハ、文化五六年の事也けんかとおもほゆ。されハこの編集の噂を聞し
ハ、寛政の年より也。三世四十年にして印行に及ひしハ実に一奇といふへし。
又見るに、卷の二第四冊、品川の条下なる洲崎弁天ハ画図
のミあり、本文なし、おとしたる歟。

右の江戸名所図会ハ、卷数を七星に配当せるよしにて、全部
を七卷と定めるを、又三冊つゝ分巻したり。おもふに編者
はしめの^(虫損)匣つもりより、楮数いと多くなりしかは、已こと
を得ず、分巻せしなるへし。しかるに紙の折目毎に、書名
と巻数をしるさず、張数を左のとち目にしるしたれハ、落
張などを改るに不便也。披閱稍久しきに至りて、毎巻貼す
る処の外題、或は破裂し、或ハ落失なるとときハ、いつれ
の巻といふことを知るに、いよ／＼不便也。著書に熟^{ナレ}ざる作
者は、是等の用心宜しからること多かり、こを分巻にせ
ず、始より全部二十卷になすことときハ、その書に貫目のつ
くこと格別也。ざるを惣に天璇之巻なとしるしたれハ、卷
の数目さたかならて、いよ／＼不便ならずや、又おもふに、

この書、西南ハ武蔵の国堺まで録したり、かゝれハ武蔵一
国の事を収めたる歟と思へハ、東北ハ五六里の外に過ぎず、
且前集に浅草隅田川などを出さハ、図説共に宜しかるへき
に、前集にハ江戸の事少くて、郊外多かり、雪旦の画ハ佳
といへとも、郊外の寺院ハ皆細画にて相似たるも多かれハ、
目さきかハらず、飽くこゝちす。是等も編者の著述に熟^{ナレ}
さる故也。又校訂もゆきとゝかすと見えて、誤字なきこと
を得ず。就中第十冊、関戸天守台の条に、相伝ふ正平七年
壬二月八日、武蔵野合戦の時、新田義貞公脇屋義治公云云
とある義貞ハ、義興の訛^{イミ}奸なるへし。是等ハ特に尤しき
誤写也。著述の上にハ、みづから思ひ誇ることもあり、さ
らても筆工剛人にあやまらるゝこと多かれハ、敢答に足ら
ねとも、さしも父祖三世四十年の苦心を積たるにハ、似け
なし。かくいへはとて、誦るとな思ひそ、婦幼の為におと
ろかしおくのミ、猶熟読して、又思ふよしもあらハ異日
とまあらん折にいふへし。 甲午春二月二十四日記。

甲午日記〔二月二二日〕

一、続西遊記国字評一冊・異聞雜稿一冊、昼後宗伯ニ申付製
本せしむ。夕方出来。

一、予去ル七日已来休筆、此右眼の患あれとも左眼恙なきに
より、八大伝九輯稿又今日よりはしむ。終日ニて一の巻本
文の内一丁半稿之、七丁め迄也。夕方より夜ニ入、江戸名

所図会第一冊披見早、如例四時一同就枕。

同〔二月二三日〕

一、予右眼の患ひ同様といへとも、今日異聞雜稿又追録し、且八犬伝九輯巻の巻の内、才に半丁余稿之、夜ニ入江戸名所図会二冊め披閱、三冊め半分許見かけ今日四時一同就枕。

同〔二月二四日〕

一、予異聞雜稿追記いたし、昼後月代等いたし候ニ付、八犬伝九輯一の巻の内、才ニ半丁余稿之、夜ニ入江戸名所図会三の冊披閱早、四の冊少々けみす。四時過一同就枕。……

三 天保四年一二月一二日出〔篠御両君に内々雜談一通〕

〔堀内快堂「曲亭書簡集」〕

一、本朝医談は被成御覽候哉、先月一友人より借覽いたし候処、尤有用之書と存候。医事は是迄唐山によらざれば蘭法に本づき候もののみに候処

天朝の医療のみを書あつめ候事、尤めづらしく忝く覚候。篇者の蔵板に候間かひ取申度、一友人にたのみ置候。篠斎翁杯別して御氣に入るべき書に御座候。

三 甲午日記〔正月一〇日〕

一、宗伯旧冬より痰咳ニて胸痛有之、朝ハ面部も少々浮腫の

二八 〔天保五年〕二月一八日

様子ニ付て、腹葉保養いたし候様、度々申聞おく。

同〔正月一日〕

一、昨夜大風雨ニ付、雪大かた打けし早。○宗伯朝起候節、宿痰ニて離義のよし、自療専ラ煎薬ス。

同〔正月二〇日〕

一、四半時比よりお百・宗伯・おみち・太郎・おさき携、飯田町清右衛門方へ年礼かね、鏡開ニ被招候ニ付罷越。……宗伯風邪ニて惡寒いたし不食ニ候へ共不及退出、一同薄暮帰宅。……

同〔正月二二日〕

一、宗伯持病の齒痛差起り、夕方より甚しく終夜伸吟不睡、
□朝ニ至て猶同様也。

同〔正月二三日〕

一、宗伯口痛今日も苦痛同断ニてうめき止ときなし、夜ニ入同断、曉七時比より痛少しうすらき睡り候よし也。

同〔正月二四日〕

一、宗伯口痛、今朝ハいたミやすらき候よしなれとも、未及平愈、追て順快なるへし。

同〔正月二六日〕

一、太郎今日より千字文を読しむ。宗伯口痛兩三遍、いまた一行も記憶せず。

同〔正月二八日〕

一、今夜四時比より宗伯又口痛不睡、今日四谷行風烈にて途中風にうたれ、口熱と風冷と相尅せし故なるへし、おミチ看病、曉七時過よりいたミ少しやわらきて睡眠と云。

同〔正月二九日〕

一、今朝五時過宗伯起出、口痛未愈、今日麻布土岐村・芝泉市等へ年始可罷越旨、昨申示し候へ共、右口痛ニ付延引保養可致旨、意見申示候ニ付、則保養ス。

一、宗伯昼後ハ又口痛甚しく、夜ニ入同断、苦痛ニて如例うめき候ニ付、五時比予、観音咒方の札を書き、年徳合壬の方へ打之、祈念早、效驗有之、四時比より痛やわらき夜中熟睡のよし也。

同〔二月一日〕

一、宗伯口痛、今日ハ大かた平愈ニ候へとも、頭痛未愈、終日平臥也。今日四時過一同就枕。但し宗伯ハ今夕五時より就枕。お百并ニ太郎ハ毎夕五時前後、先へ枕に就く也。

三 同〔二月五日〕

一、予今日昼後より初て八犬伝九輯稿本一の巻本文より創之、夜四時迄ニ壹丁半弱稿之、四時過一同就枕。

同〔二月六日〕

一、予今日八犬伝九輯一の巻本文之内、一丁半弱稿之、三丁め左迄也。筆洩り多く不稿、夜ニ入四時比少し筆すミ候へ共、時刻ニ成候故筆硯を収め、四半時一同就枕。依之今夕不睡也。八半時より熟睡ス。

三 江戸作者部類については、木村三四吾氏「近世物之本江戸作者部類考」上・下（『西莊文庫の馬琴書翰（十・十一）』『ビブリア』第一六・一七号 昭和三五年六・一〇月号）に詳しい。

三 「異聞雜稿」のこと。馬琴自筆半紙本一冊一〇〇丁。（早稲田大学図書館蔵、「続燕石十種」第二所収）
馬琴が篠斎に送ったのは、この上冊にあたる部分であろう。
いま、上冊・下冊合して一冊となっている。

三 注三参照。

三 二四。天保四年四月九日書簡（六八頁）参照。

三 文政一二年三月二日、四半時比、筋違御内外伏見屋材木

置場よりたばこ火の失火にて、大火に及び、馬琴の知己縁
辺災火に遇った。

三 甲午日記〔二月一六日〕

一、右ニ付予今日も休筆也。夕七時前より松坂殿村佐六に初
春の返翰認之、種々用事入申之ニ付、如例長文故、今夕四
時やうやく書早。宗伯今朝より感冒のよしニて半起半臥
也。今夕四時如例一同就枕。

同〔二月一七日〕

一、同朋町さし物や喜三郎へ申付候江戸名所図会あて板二枚
出来。右代銀七十二文遣之、但しあまり手薄ニ付、棧打候
様申遣ス。昼後右棧出来ル。請取早。

一、……且清右衛門ニ過日かひ置せ置候唐本平山冷燕指越し
候様申遣ス。しま八半時比帰宅、右唐本持参請取早。

一、予今朝より松板小津新蔵へ遣し候返翰長文、夕方迄ニ染
筆し早ル。巻紙一卷許也。夜ニ入平山冷燕巻の巻第三回迄
披閱。

同〔二月一八日〕

一、予松坂殿村・小津両友に之返翰なほ書もらし候事有之、
今朝より昼後迄追書八時比右両書やうやく書早、二通を一
封ニして、殿村佐五平名宛にす。大包ニ付掛目拾三匁八分

二八 天保〔五年〕二月一八日

有之、八日限状ちん式百五拾四文、かよひ帳差添、しまを
以瀬戸物町嶋やに遣之、八半時前也。嶋やハ類焼後土蔵へ
さしかけ出来のよし、右かよひ帳へ請取印形取之、夕七半
時比帰宅。……

三 注三参照。

三 二四 天保四年四月九日書簡 注一参照。

三 俠客伝第四集巻首。(次頁挿絵参照)(学習院大学蔵本)

三 井沢長秀「広益俗説弁」

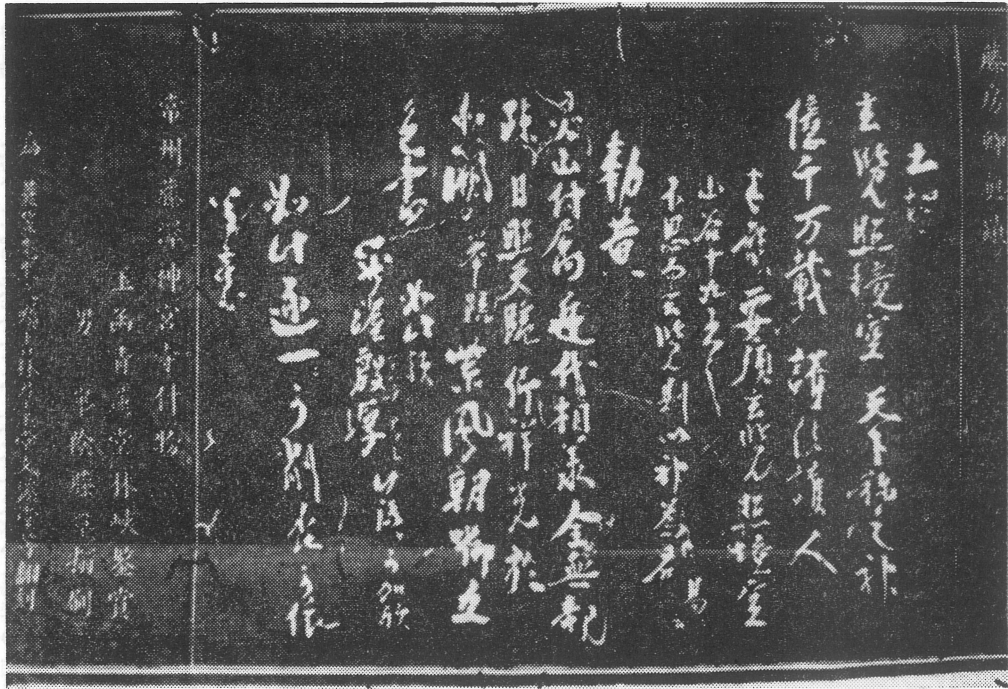
三 谷重遠「俗説贅弁」

三 斎藤彦麿「諸国名義考」二巻二冊 文化八年刊。

文化八年の刊記あるものには本居大平・川喜田常道の序(文
化七年)があり、刊記のないものには川喜田の序がない。

三 川喜田常道、江戸の人通称利右衛門、本居大平の門。

三 天保四年十一月六日付篠齊宛馬琴書簡(上野図書館紀要)第四
冊(二三所収)



一、李笠翁著述覺世名言・笠翁一家言等は、被成御覽候へと
も、いかなる人に候哉しれかね候よし。野老、笠翁と名つ
き候事、李笠翁信仰故、定めてくはしく存居可申候条、あ
らまし致注進候様被仰越、承知仕候。乍然、野老か先年し
はらく笠翁と称し候事は、彼笠翁をしたひ候て名つき候義
には無之候。いとはやくより、夫木集の、かくれみのかさ
の歌の意にて、別号蓑笠と唱候に付、蓑を略して、笠翁と
称し候得とも、大かたは、李笠翁よりつき候事と被存候仁
多く、昔年、大坂の馬田昌調よりも、日本の李笠翁先生杯
と被申越、めいわくいたし候事有之候き。笠翁は、詩文尤
精妙に候へ共、作意においては、羅貫中の半分にもうけら
れす候。中／＼笠翁を信仰は不致候也。十二楼、并に十種
曲扱にも、よき趣向御坐候得とも、又肉蒲団やうの猥褻の
作もあれは、方正の学にあらさりしなるへし。そはとまれ
かくもあれ、彼人の作は、勸善懲惡を専文につゝり候はか
り、甘心に御坐候。名言杯にも、甘心の趣向只一つ二つ御
坐候のみに候。

一、李笠翁は、清の国初の人にて、西湖の頭に家在り。故に、
湖上の笠翁と称し候。何を渡世にいたし候哉、富家のよし
に候。書齋を湖辺に作り、窓を〇如此あふきの地かみのこ
とくして、此窓の下に坐し、机に倚り、詩文并に稗史伝奇
を作りてたのしみ候よし。湖水の方より船にて見れば、あ
ふきの地帯中の画のことくに見え候よし。これらにても、

その風流想像せられ候。清帝にめされ、拝趨いたし候へとも、辞して官には就不申よしに候。李卓吾と時を同しくして、共に当時の聞人のよしに御坐候。李卓吾も、清帝にめされ、拝趨いたし候得とも、是も官には就不申候。李卓吾は、尤長髯に候よし。この李贄は、後に罪ありて、終りをよくせず。昔より、長髯の人、関羽をはしめ、多く終りをよくせざりしよし時論御坐候。笠翁は、さる禍もなく、めて度終り候人のよし、管見これらに不過候。なほくはしき事は、博物家に御たつね被成候様奉存候。但し、笠翁も、李卓吾も、清人なれば、けし坊主に御坐候。寛政中、笠翁の図を見候事御坐候。矢張けし坊主画き有之候き。

四 癸巳日記「十二月一日」

一、夜五時比鶴屋万次郎・同藤兵衛より使札、主人喜右衛門事病氣の処、今日八時死去之よししらせ也。使さし置歸去といふ。此取次しま也。不知にて送葬の日限を不聞候間、明朝使を遣し可聞よし存候ニ付、人足太兵衛へ明早朝之使申付、手かミ認おく。

四二 馬琴旧蔵は「新刻批評繡像平山冷燕」（六巻 康熙 中静寄山房刊 八冊）をさすのか、また新収のものは、おそらく清版四冊本。

二九 「天保五年」五月二日

四 甲午日記「二月一七日」

一、予今朝より右の眼中不例少々損有之、右眼一向に見えず候間、宗伯ニ様体申聞、自今日洗薬用之、今日四時如例一同就枕。

同「二月一八日」

一、予右眼少々醫有之様子にて、一向ニ不見、左眼ハ平生の如し、腹薬可然旨、宗伯申之、尚又薬用ス。

四 同「二月一八日」 注三参照。

二九 「天保五年」五月二日

一 甲午日記「三月二三日」

一、昼時、大伝馬横丁殿村店より松坂佐五平大封状届来ル。おミち請取書遣之、右ハ三月十二日出之状也。正月十二日以来、此方より三度差出し候書状之返事也。三月十八日出もめんいと代三朱、并ニ廿二日ニ出し候江戸名所図会・平山冷燕・巳年の雜考等ハ三月十一日松坂へ着いたし候よし、此外件々返事申来ル。外ニ一通先便此方よりたつねニ遣し候英双栞作者之事・筑志船物語序目等之事、外ニ俠客伝三集誤写真出し巨細ニしるし越さる。

二〇三